現場で実際に生かしている立場から

田　中　彩　子（東京女子医科大学病院）

東京女子医科大学看護学部を第１回生として卒業し、当院の中央手術室に就職して４年目となる。私が今現場で生かしている看護は大学に入学してから現在に至るまでの学び得たことを実践していると考えた。

大学では看護実践の基礎、専門的知識を養い、また管理学、研究を学んだことでより看護を深めることができた。また他大学には稀な静岡と東京の二つのキャンパスで行う学習は、健康状態や生活環境の違う様々な人々への関わり方、疾患のある人がその人らしく生活していく上で重要なことについて学ぶことができた。さらに自立し生活すること、人間関係や文化祭など学習以外の経験を通して広い視野から看護を考えることができ、その中で人間性を育み、自己の成長へと繋がる機会になった。

看護師１年目は「手術室」という未知の環境に慣れ、無我夢中で看護技術や専門的知識を学び、看護師としての自覚や責任感を感じながら、患者と関わることに精一杯の日々を送った。３年目では、教えられる立場から教える立場になった。しかし自己の目標を見失い、漠然と仕事をやめたいと思い複雑な心境の時期もあったが、役割を認識できたことで今は前向きに仕事に取り組んでいる。また今年度は院内教育のリーダーシップ研修に参加し他部署の看護師と触れ合い、看護観や日々の悩み、思いを共有することで自己の視野が広がり、多くの学びを得た。現在は自己の目指す看護師像や看護観が見え、また手術看護の特殊性や専門性を考えている。手術患者は意識のない状況下で自分の生命を医療従事者に信頼し委ねる。手術室看護師は患者の代弁者となることが重要であり、そこに手術看護へのやりがいを感じる。今後は安全に看護を提供するだけではなく、満足される看護を提供すること、それには科に精通し自信をもって看護が提供できるよう自己研鑽していきたい。

最後に看護のこころとは人間本来が持っている素直な感情であり、それをどのように捉えられるのかによってはじめて人間と人間の関わりが生まれるのだと考える。それを基に、患者の気持ちに共感する、患者のニーズを理解する、看護技術や専門的知識、コミュニケーション能力を向上させる、また他職種と協働し連携することなどが実践でき、またそれらの因子が相互に関連することで看護師としての成長に繋がるのだと考える。常に学び、人間的に成長することによって患者に満足される看護が提供できると考える。